

(トップページ:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/> )

(サウジアラビア:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/SaudiArabia.html> )

(石油:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/oil.html> )

マイライブラリー:0338

(注)本稿は2015年3月9日から23日まで4回にわたってブログ「アラビア半島定点観測」および「内外の石油情報を読み解く」に掲載したものです。

2015.3.25  
前田 高行

### サルマン新体制によるサウジアラビアの今後を占うー石油、外交政策および第三世代

目次	頁
1. はじめに	1
2. 石油政策: ナイミ石油大臣はいつ誰と交代するのか?	2
3. 外交政策: サルマンは老兵サウドをどうするつもりか?	4
4. 第三世代: 最後に笑うのは誰か?	6

#### 1. はじめに

1月23日、アブダッラー前国王の死去に伴い第7代国王にサルマンが即位してから1カ月半が経過した。新国王は即位直後の演説で前国王の路線を踏襲すると語ったが、その後副皇太子指名、内閣改造、州知事の交代、第三世代王族の登用、そして各種の行政横断的協議体を廃止し二つの最高会議に簡素化するなど勅令を連発、急速に独自色を打ち出している。

内閣改造ではサウド外相、ナイミ石油相など主要閣僚は留任しており確かに政策の継続性を印象付けてはいるが、その陰で4男の息子アブドルアジズを石油省副大臣に昇格させ、あるいは7男で国防相のムハンマドを最高会議のうちの一つの議長に任命した。一方でリヤドとマッカの州知事であったアブダッラー前国王の息子二人を解任するなどアブダッラー色を払拭する人事も行っている。

サルマンのこれまでの政治姿勢に加えて上記の事実から透けて見えるのは、サルマン新国王の政治スタイルがコンセンサス(アラブ・ベドウィン風言えば「マジュリス」)を重視したアブダッラー前国王のそれとは大きく異なると予想されることである。サルマンの政治スタイルは息子などの縁故者あるいは側近を加えた密室政治に変容するのではないかと言うのが筆者の見方である。

現在のサウジアラビアはシリア・イラク国境にまたがるスンニ派過激派組織「イスラム国」の脅威に

直面しており、また南の隣国イエメンでは同じスンニ派の過激テロ組織「アラビア半島のアル・カイダ」が「イスラム国」への対抗意識むき出しで活動を活発化させている。さらには国境のすぐ南に住むシーア派部族フーシー勢力が国家権力を掌握しイランの影響力の増大が懸念されている。サウジアラビアは東のイラン、北の「イスラム国」、南のイエメンの三方面に難題を抱え厳しい外交政策を強いられている。

一方サウジアラビア経済の屋台骨である石油は一時 100ドル/バレルを超えた価格が半値以下に下落、今年度は大幅な赤字予算となるなど深刻な歳入不足に直面している。昨年 12 月の OPEC 総会で減産しなかったことが一方の原因であり、世界の需要が停滞する中で米国シェールオイルの増産の勢いが止まらないことが他方の原因である。サウジアラビアと新興勢力米国のシェールオイル産業が対抗する構図となり、どちらが先に音を上げるかまさに「チキンレース」の様相を呈している。

そして内政面ではサウド家第三世代への権力継承という厄介な問題も抱えている。これまでアブドゥルアジズ初代国王の息子たちによって平穩に継承されてきた王位も現在のムクリン皇太子が最後である。故ナイフ内相の息子が副皇太子に指名され第三世代の中で一歩抜け出したことは間違いない。しかしその他の第三世代の王子たちが今後どのようにして権力中枢に姿を現すのか、あるいは逆に権力基盤から滑り落ちるのか、予測ははなはだ難しい。ファハド第五代国王以降、それぞれの時代の国王あるいは皇太子のもとで第三世代の息子たちが繰り広げてきた栄枯盛衰の例は枚挙にいとまがない。現在のサルマン体制といえどもいずれ訪れるポスト・サルマン時代にどうなるかはわからない。

サルマン新国王の体制下でサウジアラビアは国内外の多くの局面で変化を余儀なくされる。本稿では(1)石油政策、(2)外交政策および(3)サウド家第三世代王族の消長の三点に絞ってサウジアラビアの今後を占ってみたい。

## 2. 石油政策: ナイミ石油大臣はいつ誰と交代するのか?

サウジアラビアでは国王が首相を兼務する(統治基本法 56 条)。1 月 29 日、サルマン国王兼首相は彼にとって最初の内閣を組閣した。第一副首相にムクリン皇太子、第二副首相兼内相にムハンマド副皇太子を任命し、外相、国防相などの重要閣僚ポストおよび財務相、商工業相などの主要経済閣僚は留任した。重要閣僚ポストはサウド家王族の指定席であり、一方重要経済閣僚ポストは代々ベテランのテクノクラートの指定席である。石油鉱物資源相として留任したナイミもその一人である。

ナイミ石油鉱物資源相(以下石油大臣と略す)は世界のエネルギー業界では誰一人知らぬ人の無い人物であり、今やベテランとかテクノクラートといった形容詞を超越した存在であると言える。彼が最初に石油大臣に就任したのは 1995 年であり、今年で 20 年目を迎える。実はサウジアラビアに石油鉱物資源省ができて以来、石油大臣の数はわずかに 4 名にすぎない。最初の石油大臣はタリキ(1960-1962 年)、二人目は OPEC を率いて世界を震撼させたヤマニで 24 年間にわたって(1962-1986 年)石油大臣を務めた。その後ナーゼル大臣を経て 1995 年にナイミが第 4 代の石油大

臣となり現在に至っている。ナイミは 1935 年生まれ、今年で 80 歳になる。

健康に問題は無いようであるが年齢的に見て石油大臣の激職は大きな負担であり早晚身を引くことは間違いないであろう。今年 6 月の OPEC 総会がその花道になるのでは、という観測も流れている。彼の辞任説は今に始まったことではなく、2007 年の内閣改造時にもメディアに交代の噂が広がった<sup>1</sup>。彼が最初に石油大臣に任命された 1995 年は病弱のファハド国王にかわりアブダラー皇太子が摂政となり国政の実権を掌握した年でもある。以来ナイミはアブダラーに忠誠を誓い、またそれに恥じない活躍を続けてきた。アブダラーとナイミの信頼関係は極めて強固であった。

しかし大臣就任以来 20 年が経過、かつての石油鉱物資源省の若手も中堅からベテランの域に達し、そろそろ世代交代の時代に入った。その先頭に立っているのがサルマン国王の息子で今回副大臣に任命されたアブドラアジズである。アブドラアジズはサルマン国王の 4 男で 1960 年生まれ<sup>2</sup>。20 代後半には石油鉱物資源省次官補となり、アラビア石油の利権更新問題ではサウジ側の窓口として活躍、その後 OPEC 本部勤務を経て最近では新エネルギー開発にも携わっている。今年 55 歳になる彼は家柄、年齢、経験ともに申し分ない人物であり、ナイミ石油大臣の後任として下馬評が高いのは当然である。筆者もアブドラアジズ副大臣がかなり近い将来(サルマン国王の目が黒いうちに)、ナイミ石油大臣の後任に指名されるものと確信している。

但しそのことがサウジアラビアにとって本当にベストな選択であるかという点については若干の疑問を禁じ得ない。上記の歴代石油大臣を見ていただきたい。いずれもベテランのテクノクラートであって王族ではない。実はクウェイト、UAE など他の GCC 産油国も石油大臣はいずれもテクノクラートである。産油国において国家財政の根幹を成す石油大臣のポストは極めて重要であり、また OPEC メンバー国の担当大臣として国際的な地位が高い。名誉と地位を求める王族にとって石油大臣は極めて魅力的なポストのはずである。しかるに王族ではなくテクノクラートが任命されるのは何故だろうか？

そこには石油大臣ポストが抱える落とし穴があるからである。石油は世界のエネルギーの中樞を占めており、産油国(その多くは開発途上国である)は先進国を中心とする消費国と常に利害調整を迫られ、他方市場では需給バランスによる大幅な価格変動のリスクに対処しなければならない。昨年から今年にかけての原油価格の大幅な下落に対してサウジアラビアは市場シェアを重視し、米国のシェールオイルとどちらが先に倒れると言われる苛烈なチキンレースを始めた。その結果同国の歳入は激減している。ナイミ石油大臣の石油政策(それはとりもなおさずアブダラー前国王の政策でもある)が問われている。ナイミがその責任を取らされてもおかしくない状況なのである。つまり石油大臣ポストは極めて不安定であると同時に、問題が起こった(あるいは最高権力者が問題ありと判断した)時、首を挿げ替えることのできるポストとみなされている。またそれによって最高権力者自身も直接の責任追及を免れることができると言える。

ところがアブドラアジズが石油大臣に就任すれば石油政策にミスがあっても国王の息子を首にすることはできないであろう。せいぜい副大臣または次官クラスのテクノクラートをスケープゴートに

するのが関の山である。責任があいまいになることは間違いない。ちなみに同じような例をサルマン自身に見ることができる。彼のリヤド州知事時代の1990年代半ばにリヤドで過激派テロが頻発したことがあった。欧米諸国であれば知事が引責辞任するケースであるが、彼は兄のナイフ内相の助けで知事の職を保持したのはその一例である。

石油がらみで今回もう一つ不可解な人事があった。アラムコの副社長二人がほぼ同時に辞めたことである。一人は Khalid Al-Buainain 技術サービス担当上級副社長であり、彼は1980年に入社、住友化学工業との合併事業 PetroRabigh 会長も兼務していたが、3月初めにアラムコを離れた<sup>3</sup>。もう一人は Samir Al-Tabib エンジニアリング担当上級副社長である。彼の場合は何と国防省のプロジェクトマネジメント責任者(director)に転身している<sup>4</sup>。国防大臣のムハンマドはサルマン国王の7男でアブドルアジズ副大臣の異母弟である。ムハンマドがどのような目的で異母兄の石油省から副社長を引き抜いたのかその意味するところは甚だ興味深いだが、部外者が理解するのは極めて難しい。

### 3. 外交政策: サルマンは老兵サウドをどうするつもりか?

ファイサル第三代国王の4男サウドは1941年生まれ、今年74歳になる。彼が外務大臣になったのは1975年。何と40年もサウジアラビアの外務大臣を務めているのである。世界的に見ても一国の外交をこれほど長期間にわたり担っている人物は他にはいないであろう。

彼は父ファイサルが暗殺されたその年にハリド新国王によって34歳の若さで外務大臣に任命された。ファイサルが暗殺されずにもう少し王位を続けていれば(歴史に「もし」は禁句であるが)彼の息子たちは歴代国王の息子たちのように政権の中枢に抜擢されたに違いないが、ファイサル家の長男はソニーの代理店として有名なアル・ファイサリア・グループを創設してビジネス分野に転身した。その意味で外務大臣になったサウドはファイサル家の希望の星であった<sup>5</sup>。

ちなみにサウド家の王子たちは名前の最後にサウド家の証である「Al Saud」の名を冠する。一例を示すとサルマン現国王のフルネームは「HRH Salman bin Abdulaziz Al Saud」となる。ところがファイサル家だけはファイサル第三代国王の名を家名としておりサウド外相の場合は「HRH Saud Al Faisal」である(HRH は初代国王 Abdulaziz の直系男子であり王位継承権があることを意味している)。これはファイサルが非業の死を遂げたために許された家名であり、ファイサルの子孫は特別扱いされているのである。

サウドが外相になった1975年からこれまで中東は大きく動いた。1979年にはイラン革命が勃発、シーア派政権が生まれた。以後サウジアラビアとイランは不倶戴天の敵となる。その後イラン・イラク戦争(1980-1988年)とそれに続く湾岸戦争(1990年)から2003年のイラク戦争までイラクのサダム・フセイン政権との関係は、前半は蜜月状態であったが、後半は一転して対立関係になった。その間にもイスラエル・パレスチナ紛争は絶えることがなく、また2001年にはサウジ出身のオサマ・ビン・ラデンを首謀者とする9.11テロ事件が発生、テロ対策が最大の外交課題となった。外交はそれまでの国家対国家の対決から、姿の見えない過激派組織と対決する構図に変化したのであ

る。さらに2011年には「アラブの春」事件が発生、サウド外相は GCC の君主制護持に腐心させられた。エジプトがイスラエル単独和平でアラブの盟主の座を失って以来、サウジアラビアは中東・湾岸外交のキー・プレイヤーに祭り上げられ、サウド外相は東奔西走の日々であった。

そのサウド外相は現在74歳。サルマン国王の新内閣発足の時、彼は米国の病院に入院中だった<sup>6</sup>。サウド外相がサルマン新内閣で留任を望んでいたとは考えにくい。彼はアブダッラー前国王から外交の全権を任せられ、前国王との信頼関係は格別のものがあったはずである。実はサウド外相はアブダッラーが皇太子時代の1990年代に一度辞任を決意したことがあるといわれる。当時スルタン国防相の息子バンドル駐米大使がバンドル・スルタン・ファハド国王のラインで対米外交を取り仕切り、サウド外相がないがしろにされたためである。アブダッラー皇太子自身もステイリ・セブンの専横に悩まされており、サウド外相の気持ちは十分すぎるほど理解できたと思われるが、アブダッラーはいずれ自分の時代が来るまで辛抱するようにとサウド外相を諭したといわれる<sup>7</sup>。1995年にアブダッラーが摂政となり国政の実権を握って以来サウド外相は再びやる気を取り戻したようである。しかしアブダッラー亡き今サウドはステイリ・セブンの生き残りであるサルマンを支えるつもりがあるか否かは疑問である。

一方サルマンの泣き所はサウドほど外交に精通した息子がいないことである。そもそもサルマンの息子たちは石油省のアブドルアジズを除いて行政経験の長い者がいない。サルマン自身はリヤド州知事を長く務めたものの自分の息子を引き立てることはなかった。長男のファハドを東部州副知事に送り込んだが、不摂生が原因と言われ46歳の若さで心臓病で亡くなっている。三男のアハマドも2002年に亡くなっているが、当時9.11同時多発テロ事件への関与がささやかれていた。父親のサルマンはイスラム慈善活動に熱心であり王族としては当然であったかもしれないが、米国では彼が関連した慈善活動の浄財がイスラム過激派に流れたのではないかという根強い不信感があった。

サルマンに対する米国の扱いが何となくよそよそしいのは、彼に対する不信感が今も米国にあるからかもしれない。サルマンとしては最も重要な対米外交を任せられることができるのは当面サウドしかないのである。これまでサウド家内の権力闘争に精力を注いできたサルマンは対米のみならずアラブ諸国についても外交音痴と言って間違いない。

サウドが自ら辞任するかあるいはサルマンが彼を罷免するか？ いずれにしてもサルマンとサウドの仲は長く続かないと思われる。誰がサウドの後を継ぐか？ 対米外交を最優先するなら、共和党時代に米国に強固な足場を築いたバンドル元駐米大使も候補者の一人であろう。共和党は現在上下院で多数を占め、バンドルが親しかったブッシュ(ジュニア)元大統領の弟ジェブ・ブッシュが次期大統領として有力視されていることを考慮すると「バンドル外相」はうってつけかもしれない(但しバンドルが故スルタン国防相の息子であることがサルマン国王の判断に微妙に影響する可能性は否定できない)。

一方、シリア、イラン、「イスラム国」、イエメンのアル・カイダ勢力等々がもつれ合う複雑極まりな

いアラブ外交をこなすには外相はかなりタフな人物でなければならない。サルマンの息子たちを含め「銀の匙」をくわえ、生まれた時から甘やかされた若手の第三世代の王子ではタフな外交交渉は務まらないであろう。

サルマン時代の外交は日和見的な場当たり外交になるのかもしれない。

#### 4. 第三世代:最後に笑うのは誰か？

今回のサルマン新国王体制で最も注目すべき人事は何とんでもムハンマド・ビン・ナイフ内相を副皇太子に選んだことであろう。副皇太子のポストはアブダッラー前国王の時代に現在のムクリン皇太子が選任されたのが初めてである。それまでにも国王、皇太子に次ぐ No.3 として次期皇太子候補含みで第二副首相が任命されたことは何度かある。しかし故ナイフ内相(ムハンマド現内相の父親でステイリ・セブンの四男)が 2009 年に第二副首相に抜擢されたとき、ステイリ・セブンの復活を警戒したタラール王子(初代国王の 18 番目の息子。富豪アルワリード王子の父親)がクレームをつけた例があった<sup>8</sup>。

このためかアブダッラー前国王は 2014 年 3 月に当時のムクリン第二副首相に副皇太子の称号を与えたが、これには二つの大きな意味があった。一つは王位を第二世代の最後まで引き継がせるという意味の表れであり、もう一つは母親が名門出身でなければならないとしてこれまで暗黙の了解事項とされてきた第二世代王子の出自が問われなくなったことである。

ムクリン王子はアブドルアジズ初代国王の 36 人の息子の 35 番目、第二世代の生存者としては最も若い(1945 年生)。また彼の母親バラカ妃はイエメン出身の無名の女性であり、歴代国王や皇太子の母親のような名門出身ではない。第二代サウド国王以下歴代国王の母親はいずれも名門出身であり、たとえばファハド第四代国王、サルマン現国王の母親は名門ステイリ家の出身であり、アブダッラー前国王の母親もベドウィンの名門シャンマリ族出身である<sup>9</sup>。このような前例を見て世間ではアブダッラー国王時代の皇太子がスルタン、ナイフ、サルマンと続いた後、次の皇太子は第三世代の血統の良い王子が指名されるものと見ていた。ところが今回ムクリンが正式に皇太子に昇格したのである。

ここにはさらに第三の意味が含まれていた。これまで新国王即位後の後継者指名については第二世代の息子あるいはその子孫で構成される「忠誠委員会(Allegiance Committee)」の合意が必要とされてきた<sup>10</sup>。しかし今回のムクリン皇太子あるいはムハンマド副皇太子の指名については「忠誠委員会」が開かれたという確認報道は無く、仮に開かれたとしても形式的・表面的でまともに審議された形跡が見られず、サルマン新国王が一方的に決めたことは間違いないようである。忠誠委員会はサウド家の「マジュリス」(評議制度)でありコンセンサスを重視するベドウィンの伝統に従ったものである。サルマンの統治手法はこのようなコンセンサス重視から国王による指揮命令系統の一本化、強権政治に変質し始めている。そのことは勅令で石油最高会議など多くの諮問会議を廃して二つの評議会に集約したことにも表れている。そのうちの一つ政治安全保障評議会議長にはムハンマド副皇太子を、残る一つの経済開発評議会議長には息子のムハンマド国防相といずれも第三世

代の王子を指名したのである<sup>11</sup>。

今回の一連の人事によりサウド家にもいよいよ第三世代の時代が訪れたと言えよう。但し第三世代の王子の数は極めて多い。1998年に発行された「Family Charts of Saudi Royal Family Descendants」(Al-Ruwaishid 著)によれば第三世代の王子の総数は当時 254 人であった。その後この人数は変動しているであろうが、現在も 200 人を下らないことは間違いない。統治基本法第 5 条によりこれら 200 人余りの王子にはいずれも王位継承権がある。

その中から一頭地を抜けたのがムハンマド副皇太子であり、それに続くのがムハンマド国防相他のサルマン国王の息子たち、あるいは国家防衛隊長官(閣僚)など前国王の息子たちであろう。もちろんファイサル第三代国王の遺児サウド外相やハーリド・マッカ州知事のようなベテランの第三世代もいる。但し彼らベテランはいわば「早すぎた第三世代」であり、王位継承問題に関わるには高齢すぎる。

(注)図表「サウド家第二～第五世代の主要王族」参照。

<http://members3jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-1.pdf>

それではこれら「早すぎた世代」を除きサルマン国王が任命した王族閣僚・州知事がそのまま次代の支配層になるのであろうか？世評では今回の人事の顔ぶれを見て「ステイリ・セブン」の復活を唱える向きもある。しかし筆者の見解は異なる。「ステイリ・セブン」がそのままかつての勢力を取り戻すとは考えにくい。「ステイリ・セブン」は血のつながった同母兄弟だったからこそその絆であり、彼らは異母兄弟(アブダッラーなどその数は 30 人近い！)と対抗するために結束したのである。異母兄弟間の争いが時として他人同士よりも激しいことはサウド家に限らず日本でも西武鉄道グループの堤兄弟一族の骨肉の争いを見ても分かるであろう。「ステイリ・セブン」の息子たち第三世代は単なる従兄同士の関係でしかない。もちろん彼らはお互いに支えあうことにメリットがあれば助け合うであろう。しかしそれはあくまでドライな合従連衡策の一つであってウェットな血のつながりによるものではないと思われる。

もう一つ注意すべき点は現在の顔ぶれで将来の王位継承問題を語ることである。国王が代わり新たな皇太子(および副皇太子)が決まると彼らの息子たちが登用されるのは当然の成り行きである。ファハド元国王の時代には彼の息子たちが重職に就き、アブダッラー前国王の時代も然り。そしてサルマン現国王は息子たちを次々と重職に登用している。しかしこれとてサルマンが亡くなれば元の木阿弥になるであろうことはファハドおよびアブダッラーの例を見るまでもない。サルマン亡き後、ムクリン国王のもとでサルマンの息子ムハンマド国防相が安泰とは言えない。1980 年生まれの若いムハンマド・ビン・サルマンが更迭され、さらにはサルマンの息子たち異母兄弟の間で骨肉の争いが起こる可能性も否定できない。ファハド元国王死去後、ムハンマド東部州知事とアブドルアジズ国務相(肩書はいずれも当時)が職を解かれ、異母兄弟で骨肉の争いがあった。歴史は繰り返しサルマン家にお家騒動が起こるといってデジャブ(既視感)の気配が漂う。

結局現在のところムハンマド・ビン・ナイフ副皇太子が国王になるその時まで第三世代のパワー・

ゲームは決着がつかないであろうというのが筆者の見解である。ムクリンがいつ国王になれるか（あるいはスルタン、ナイフと同じく国王になれないまま死ぬかもしれない）？ ムハンマド副皇太子がいつ皇太子になり、さらに国王に即位できるのか？ それらのことが何年先になるかわからないため、第三世代の勢力地図も流動的である。ただ強いてあげるとすればムクリン皇太子が大きな力ギを握っていきそうな気配がする。ムクリンは全くのダークホースとして皇太子になった。彼は王位継承権を持ちながら一族の中で傍流を歩んできた。「ステイリ・セブン」と反ステイリ・セブンのせめぎあいの中でいわば「瓢箪から駒」で皇太子に指名されたようなものである。彼は一族内の権力闘争ではしがらみのない中立的な立場にあり、その意味でサウド家の将来を純粋かつ客観的に見通すことができる。第三世代を導いていく人物になることができるのは第二世代最後の王子である彼しかいないと考える。

(完)

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601  
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642  
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp

---

1 拙稿「辞めさせてもらえないサウジアラビアのサウド外相とナイミ石油相」(2007年4月)参照。  
<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0154SaudNaimi.pdf>

2 サルマン国王家系図参照。 <http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-7.pdf>

3 2015/3/2 付け Arab News, 'Aramco senior VP steps down'  
<http://www.arabnews.com/economy/news/712131>

4 2015/2/13 付け Arab News, 'Defense minister makes key appointment'  
<http://www.arabnews.com/featured/news/703706>

5 ファイサル家系図参照。 <http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-9.pdf>

6 2015/1/24 付けロイター電 'Saudi foreign minister has successful back surgery in U.S. - agency' 参照

<http://uk.reuters.com/article/2015/01/24/uk-saudi-princesaud-idUKKBN0KX0RF20150124>

7 弊レポート「辞めさせてもらえないサウド外相とナイミ石油相」(2007年4月)参照

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0154SaudNaimi.pdf>

8 弊レポート「振出しに戻ったサウド家の後継者問題」参照。

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0207SalmanDefenceMinister.pdf>

9 「アブドルアジズ初代国王の王妃とその子息達」参照。

<http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-3b.pdf>

10 「忠誠委員会メンバー」参照。 <http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-3a.pdf>

11 2015/1/30 付け Saudi Gazette, 'King Salman gives bonus to state employees, reshuffles Cabinet' 参照。

<http://www.saudigazette.com.sa/index.cfm?method=home.regcon&contentid=2015013023214>